

ヨーランドの領域分析と存在論

横山 幹子 (Mikiko Yokoyama)

所属 筑波大学図書館情報メディア系

「人間の知的活動によって生産された情報の諸側面を研究する学問」(緑川信之, 2005, p.185)であり、「社会における知識の共有を保持するという社会的価値を持つ総合的領域であり、人間の本質的な在り方としての知識共有という現象に注目した領域」(石井啓豊, 2005, p. 31)である図書館情報学は、人間の知的活動や知識の共有を問題としている点で哲学と親近性がある。そして実際、図書館情報学研究の認識論的な出発点、方法論が、実証主義的であるべきか、それとも他の方法が望まれるべきかという議論(たとえば、J. M. Budd; H. Hill; B. Shannon, 2010)や、図書館情報学研究において客観性を目指すためには図書館情報学に実在論の視点を導入することが必要だという議論(たとえば、B. Hjørland, 2004)がなされてきた。また、*Introduction to Information Science* (D. Bawden; L. Robinson, 2012)では、ポパーの認識論やフロリディの情報の哲学の例が挙げられ、哲学における存在論・認識論と図書館情報学との関係性が述べられている。

「知識の組織化」を専門とする図書館情報学者ヨーランドは、図書館情報学と哲学との関係についての代表的な研究者である。彼は、ニヨリが認知的アプローチと社会学的アプローチの両方を図書館情報学研究の方法論として取り込めるような存在論として複数主義を採用すべきだと主張していること(C. Gnoli, 2018)を批判した。そして、「知識の組織化」のために、社会学的なアプローチとしての「領域分析」をなすべきことを主張する一方で、複数主義ではなく一元論の存在論を採用すべきだと主張(B. Hjørland, 2019)した。

このような状況を受け、本発表の目的は、ヨーランドを取り上げ、彼の「知識の組織化」についての主張である領域分析と存在論の関係を検討することである。上述したように、ヨーランドは社会学的なアプローチを採用し、知識の組織化に関して、領域分析を主張する一方で、客観的なものを認めたいと考え、存在論として一元論を提唱しているが、それが本当に「知識の組織化」研究に相応しい存在論であるかどうかは明らかではない(横山 2020)。それゆえ、本発表では、領域分析を支える存在論として一元論以外の可能性を検討することにより、「知識の組織化」について領域分析を考え、かつ、図書館情報学研究の客観性を主張するための存在論は、ヨーランドの主張する一元論である必要はないということを明らかにしたい。

そのために、まず、ヨーランドの考える存在論が(たとえば、B. Hjørland, 2019, 2021)どのようなものなのかを明らかにする。次に、彼の考える領域分析(たとえば、B. Hjørland, 2002, 2017)がどのような考えかを示す。それから、晩年のパトナムの考え(たとえば、H. Putnam, 2010, 2016)とガブリエルの「新しい実在論」(たとえば、M. Gabriel, 2014, 2015)がどのようなものかを示す。その後で、

パトナムの晩年の考えやガブリエルの实在論と領域分析が矛盾するのかを検討し、ヨーランドの考えるような一元論を採用しなくとも、領域分析を認める可能性について考察する。

参考文献

- 石井啓豊. “図書館情報学の展望：知識共有の総合科学”. 図書館情報大学史：25年の記録. 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科編. 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科, 2005, p. 28-40.
- 緑川信之. “図書館・情報学への招待”. 図書館・情報学入門. 三田図書館・情報学会編. 勁草書房, 2005, p. 185-218.
- 横山幹子. 図書館情報学における存在論の対立：Gnoli の存在論的複数主義とHjørland の存在論的一元論の比較. *Library and Information Science*, 2020, vol. 84, p. 1-21.
- Bawden, D.; Robinson, L. *Introduction to Information Science*. Facet Publishing, 2012.
- Budd, J. M.; Hill, H.; Shannon, B. Inquiring into the real: A realist phenomenological approach. *Library Quarterly*. 2010, vol. 80, no. 3, p. 267-284.
- Gabriel, M. (Hrsg.). *Der Neue Realismus*. Suhrkamp, 2014.
- Gabriel, M. *Warum es die Welt nicht gibt*. Ullstein, 2015.
- Gnoli, C. Mentefacts as a missing level in theory of information science. *Journal of Documentation*. 2018, vol. 74, no. 6, p. 1226-1242.
- Hjørland, B. Domain analysis in information science: eleven approaches-tradition as well as innovative. *Journal of Documentation*. 2002, vol. 85, no. 4, p. 422-462.
- Hjørland, B. Arguments for philosophical realism in library and information science. *Library Trends*. 2004, vol. 52, no. 3, p. 488-506.
- Hjørland, B. Domain analysis. *Knowledge Organization*. 2017, vol. 44, p. 436-464.
- Hjørland, B. The foundation of information science: One world or three? A discussion of Gnoli(2018). *Journal of Documentation*. 2019, vol. 75, no. 1, p. 164-171.
- Hjørland, B. Information retrieval and knowledge organization: A perspective from the philosophy of science. *Information*. 2021, vol. 12, no. 3, p. 135-159.
- Putnam, H. “On not writing off scientific realism” (2010). De Caro, M.; Macarthur, D. ed. *Philosophy in an Age of Science: Physics, Mathematics, and Skepticism*. Harvard University Press, 2012. P.91-108.
- Putnam, H. “Naturalism, realism, and normativity” (2015). De Caro, M. ed. *Naturalism, Realism, and Normativity*. Harvard University Press, 2016. P.21-43.
- 本研究は、JSPS 科研費 21K00001 の助成を受けたものです。